

## 「鳥の巣世代」 中国経済新聞 081001 掲載

中国語の「八〇後」とは、一九八十年代に生まれた世代のこと。

二億人といわれるこの世代は、ちょうど中国で「一人っ子政策」が始まった時期に誕生し、改革・開放政策が進展するなかで成長したので、「小皇帝」「苦勞知らずの甘えん坊」「ふとんもたためない」「ファストフード好き」「アニメとネットにはまる」など、マイナス面の評価が一般的だった。

特に「八〇後」の親の世代が文化大革命で苦勞したので、子どもには良い教育を受けさせ良い暮らしをさせたいと強く願ひ期待している（中国語で「補償心理」という）ことも、背景になっていた。

古来、いつの時代でも年寄り「今どきの若者は……」とグチをこぼすのが常だが、「八〇後」世代はそれ以上に非難を浴びていた。

評価が一変した契機は、五月に起きた四川省大地震だった。

人命救助の第一線で奮闘した解放軍兵士と救援隊員、裏方に徹して黙々と働いたボランティア、献血の行列に並んだ若者など、無数の無名の英雄たちの大半が「八〇後」だったのだ。「見直した」と称賛の声が一斉にあがった。

つづく北京オリンピックとパラリンピックで活躍した十万人のボランティアも、大半が「八〇後」だった。世界からやって来たアスリート、報道関係者や観客に対しても、恥ずかしがったり怖けづいたり見下したりせず、おおらかに受け入れたし、異なる風習や見解にも寛容に対応した。「八〇後」は五輪を通じて貴重な体験をしたが、同時に中国を見る世界の目にも良い影響を与えたようだ。

そこで誰かが彼らを「鳥の巣世代」と名づけたところ、たちまち広がった。「鳥の巣」とは言うまでもなく、北京五輪の開会式や陸上競技がおこなわれたスタジアムの愛称で、北京五輪のシンボルとされる。中国青年報の調査によると、この世代のキーワードは「自信」が一位で、「平和・和解・調和」と「開放」がつづく。

中国が「自信」というと、西側ではとかく「偏狭なナショナリズム」と受け取られがちだが、ここでいう「自信」とは、「列強に百年にわたり侵略された民族の屈辱」という被害者意識を持たず、地球村の一員として世界に溶け込む「雅量」と表裏一体になっている。

ネットの調査によれば、「鳥の巣世代」の多数が、オリンピックの受け入れを通じて学んだフェアプレーの精神で、これからの社会生活に参画していきたいと表明している。

北京五輪が中国に残したソフト面の「遺産」は、彼らに引き継がれ、中国をさらに成熟した社会へと推進するだろう。